

# 万葉集卷十三「久々利の宮」歌成立の背景

——東山道美濃国可兒駅と久々利の特色を中心に——

佐藤隆

## 一 はじめに

畿内から東国をながめた時、尾張国と美濃国がまず存在する。その美濃国を詠んだ歌が万葉集卷十三にある。

ももぎね 美濃の国の 高北たかきたの 久々利の宮に 日向ひむかか  
ひに 行靡ゆき闕あひ矣や（ある女が）ありと聞きて 我が行く道  
の 奥おく十山とせやま 美濃の山 なびけと 人は踏めども かく  
寄れと 人は突けども 心なき山の 奥十山 美濃の山

（13・三三四二）

右の一首

百岐年 三野之國之 高北之 八十一隣之宮尔 日向尔

行靡 闕 矣 有登聞而 吾通道之 奥十山 三野之  
山 靡得 人雖跡 如此依等 人雖衝 無意山之 奥磯  
山 三野之山  
右一首

である。当該歌六句目の「行靡闕矣」の訓は、難訓であつて現在も定訓を得ていない。ただし、国名の「三野之國」は美濃国であり、地名の「八十一隣」は美濃国の久々利、現在の岐阜県可兒市久々利と推定される。また、難訓が存在するがその全体の語構成から、ある人が美濃国の久々利の宮を舞台にし、愛しい娘子に逢うことをひたすら求める内容であることは、容易に推察される。

本稿では、東山道や別路を再確認し、久々利の歴史的状況

古墳や近年発見された木簡、また、記紀の記事に注目し、当該歌が生まれた背景を明確にし、詠出した状況や作者について言及する。

## 一 先行諸説

先行研究としては、松田好夫の『万葉集「行靡闕矣」』卷十三・三三四二の本文復原<sup>1)</sup>があり、井村哲夫の『「行靡闕矣」考』<sup>2)</sup>、続貂<sup>3)</sup>や、曾倉岑の『萬葉集全注』の説<sup>4)</sup>がある。そして、それらを総括して論を展開する廣川晶輝の『万葉集』卷十三・三三四二番歌について「久々利」と記す飛鳥池遺跡出土木簡と関連させて<sup>5)</sup>がある。また、道に注目した木野村茂美の説<sup>6)</sup>や筆者の説もある。

まず当該歌の難訓「行靡闕矣」の訓について触れる。早く松田好夫は「「行靡闕矣」考」にて諸説を十一説に整理する。そこに詳しい言及があるので各説の検討はそれに譲る。代表的な訓を挙げれば、ゆきなびかくを（西本願寺本・代匠記・略解）、いでましのみやを（考）、ゆかましさとを（古義）であった。松田説はこれらの訓をすべて否定し、本文の「闕

の文字に注目し、文字通り闕文の表記と捉え何音かが闕けているとした。そして詩形から四音を想定し、古事記や万葉の用例から「たわやめ」の語を推測する。そして、訓を「ゆきなびける たわやめ を」とし、本文を「行靡 手弱女矣」と復原した。多くの用例を駆使し厳密に推測を加えた魅力的な説であり、歌全体の世界とも合致するが、推測の部分を保証する資料が不足し、定説には至っていない。

当該歌の表現内容の捉え方については、従来説を総括し展開した最新の廣川説がある。それに従いながら紹介する。廣川は「ありと聞きて」を万葉集や記紀の用例から究明し、ありと聞く対象を「ある女性」として、「その女性がいると聞いて」と捉える。松田説と同様の発想である。その後、「我が行く道の」は女性の許へと通うの意とし、「なびけと人は踏めどもかく寄れと人は突けども」は「その道を通う男にとつて望まれる。その思い」の意とし、「心なき」は「恋情にからわけて把握する方が妥当であろう。」として、

不明な部分もあるものの、当該歌は表現からは、美濃の国のくくりの宮があり、（その宮にいるのかどうかは、「行靡闕矣」の関係上、明確に言えないが）女性がいる

と聞いて、その女性の許へと通おうとする内容であることがわかった。

として全体を捉えている。用例を確認した詳細な検証であり本稿はこれに従う。

次に、廣川は景行紀に見られる「八十一隣の宮」について言及する。万葉集以外の外部資料である景行紀の美濃国行幸の説話との関係について、

当該歌は景行天皇の行幸に関わる話と何らかな形で手を結び合うこととなるう。

とその関わりを認める。万葉歌と景行紀との具体的な関係は不明であるが、廣川説の如く当該歌と景行天皇の行幸記事との関係は視野に入れておくべきと考える。

廣川は続けて、当該歌に対する『全注』曾倉の虚実説に言及する。曾倉説は、

諸注のいくつかが説くように景行紀と関係があるとは言え、この歌は全体として虚構の上に立っていると考えなくてはならないであろう。過去のこと——史実であれ伝説であれ——を現在と仮想する、あるいは過去の中にある自分を仮想する虚構をである。前掲松田説その他、

この歌を恋の民謡などと考える説が泳宮を単なる場所と考えているのは誤りであろう。

と「虚構」に言及し、当該歌を民謡などとする説に対して、

その御嶽宿のあった可児郡御高町のあたりに「延喜式」の可児駅があったとされる。この歌は、この道を往来する官人たちによって、可児駅に宿泊した夜などに歌われたのではなからうか。

と官人の歌とする説を展開している。

廣川はこの曾倉説を「この説はきわめて魅力的な説と言えるよう。」と官人説を肯定する。ただし、当該歌の成立時期については疑問を呈する。従来、当該歌の成立時期は人麻呂以前とされてきたが、曾倉説は窪田評釈説にしたがって、東山道を吉蘇路を利用し信濃の国庁に行く人の歌とし、「時は、吉蘇路の拓けた、少なくとも和銅六年以後のことである。」に賛同し、奈良時代の新しい歌とする。一方、廣川は当該歌の「古さ」に注目し、そこからは離脱できないとする。筆者も後述するように当該歌の成立を奈良時代以前とし、天武朝ごろの発生を考えている。

また、当該歌の成立を吉蘇路の完成以後と推定する場合は、

その吉蘇路と久々利のと距離について注意が必要である。東山道は可児駅から土岐駅を通つて大井駅を進み坂本駅に至るが、壱戸道である吉蘇路はその坂本駅から分かれて北上し、木曾川に沿つて信濃国府（松本）に進む新道である。当該歌に詠まれている久々利からは、かなり離れた場所の新道である。そのため久々利と吉蘇路とを安易に結び付けることはできないと考える。行く道を遮る山々は、すでに久々利周辺に立ち出でていることは、現地に訪れてみれば理解できる。

さらに、当該歌が卷十三に収載されていることも注意される。卷十三歌の成立時期を、早く賀茂真淵は卷一・二に次ぐ「古撰」としたが、一方、自らの但し書きにて時代の下つた歌の存在も認めている。つまり、漠然と古巻と片付けることもできないし、全てが新しいとも言えないのが現状である。今後のそれぞれの歌への追求による成果が待たれる。

### 三 多様な古東山道・東山道と美濃国

まず、東海地方の東山道を確認する。延喜式による東山道の構成国は、

近江・美濃・飛騨・信濃・上野・下野・陸奥・出羽の八国である。ただし、出羽国が北陸道に属し、武蔵国や尾張国が東山道に属した時が推定される。

また、久々利地方に関わる、近江国から美濃国を進み信濃国に至るが東海地方の東山道は、平城京から近江国に進み、近江国から不破関（岐阜県不破郡関ヶ原町松尾）を越え、不破 大野 方縣 各務 可児 土岐 大井 坂本の各駅を通り、神坂峠越えて信濃国の阿知駅に至ることになる。

美濃国内の東山道は、西濃では令制以前から木曾三川の渡河に難渋し、中濃では山々がすで行く手をさえぎっていた。その美濃国の東山道は「西濃」「中濃」「東濃」とに大別されるのである。すでに古代史の<sup>7</sup>大下武が古墳分布も視野に入れて古東山道を復原している。次にそれを紹介する。

#### 《西濃》

【不破駅（不破郡垂井町）】

東に向かう場合、赤坂に至り、

（古東山道）近世の中山道ではそのまま真東に揖斐川に進むが、揖斐川の本流であった杭瀬川は渡河が

容易でなく、金生山の東に沿って杭瀬川右岸を遡つてから渡河し、山沿いを東に向かい大野駅（揖斐郡大野町下礪）を経ないで方懸駅（岐阜市長良）に至る、美濃の「山辺の道」とも言う。

（東山道） 令制の道はそのまま杭瀬川を船で渡河し東の大野駅に向かう。

【大野駅（揖斐郡大野町下礪）】  
から、さらに東に向かう。

【方懸駅（岐阜市長良）】  
に至る。方懸駅の「日野の渡し」で長良川を渡河し、

【各務駅（各務原市鵜沼）】  
に向かうことになる。

#### 《中濃》

各務駅の一キロ先に「鵜沼の渡し」があり、街道の難所である木曾川を渡河することになる。なお、後世の中山道は上流の「太田の渡し」で渡河する。

この地区は対岸の犬山とともに、木曾川により造成された広大な濃尾平野の谷口にあたり、早くから水陸交通の要衝であった。

【可児駅（可児郡御嵩町顔戸）】

に向かい、そこから山中に入る。古東山道も同様の道筋と推察される。現在の国道二一号線に重なる道筋で、可児駅から国道を登り峠に至る前で東北に離れて山中を土岐駅行く。

【土岐駅（瑞浪市釜戸町）】  
に向う。近世の中山道とほぼ同じ道筋である。

このように、揖斐川の渡河に難渋した東山道は、時代とともにその道を南下させ、美濃国をほぼ東に進んだ。そして、鵜沼駅に至り、難所の木曾川を渡河するのであった。鵜沼側の南町から犬山側の内田町に船で渡り、東北に北上しながら可児駅に向かうのである。この道筋は古東山道も東山道も同じである。

#### 四 可児盆地の道

東山道を、木曾川の「鵜沼の渡し」で渡河した後、山を越えて進む。そして北西は開けているが可児盆地と呼ばれる地に入ることになる。そしてそこに流れる可児川に沿って可児

駅（顔戸）に進むことになる。その可児駅の手前に可児川に注ぐ久々利川があり、その川に沿ってほぼ東に遡り山麓付近に至ると、当該歌に詠まれた久々利の地がある。この周辺について紹介する。

「鵜沼の渡し」で渡河し可児駅に向かう道筋は、現在の犬山市から可児市に進むことになる。現在の名鉄広見線が、愛知県の「犬山」「富岡前」「善師野」を走り、岐阜県の、

「西可児」「可児川」「日本ライン今渡」「新可児」（JR太多線の「可児」と運行しているが、その線路と同様の道を進み、可児市の広見からは次第に中濃の山中に分け入ったと推定される。

本道としての東山道は、可児市の可児川に沿った道筋である。令制の東山道も近世の中山道も同様で、現在の国道二一号線に重なる道である。

注意すべきは、この可児市内の別路の存在である。可児市内の可児川には、「久々利川」「大森川」「姫川」が流れ込んでおり、その川に沿って多くの後期古墳が存在していることを、可児市は『可児市史』<sup>1)</sup> 第一巻の「後期古墳の分布と可児地域内の地域割」や「横穴墓の盛行」<sup>2)</sup> において報告している。

後期古墳時代から川に沿って人々が生活し、そこには様々な道が開けていたのである。

「久々利川」に沿う道は、可児市の広見からほぼ東に進み、山裾の久々利に至る。そこからさらに山中に入り、峠を越えて土岐市に至る道である。現在の県道八四号線（土岐可児線）である。

「大森川」「姫川」に沿う道は、東南に進み現在の多治見に至っている。「姫川」沿いの道は、現在のJR太多線が美濃太田と多治見を結び多くの人々の交流があるように、木曾川流域の地と多治見や土岐の土岐川流域の地と深く関わる道である。後期古墳の分布の地域割では、姫川流域は「姫治地区」とされ、多治見地区と関連させて調査が進められている。

このように、木曾川に近い太田周辺や盆地の可児川・久々利川・大森川・姫川周辺には、後期古墳が多くあり、古墳時代、あるいはそれ以前から人々が多数居住し、行き交い繁栄した地域であった。その太田周辺とともに可児川周辺は様々な道があったことは注目すべきである。



可児郷土歴史館に展示された可児市付近の地形図。

左側の川が木曾川。その右側が可児川。上部で右に分かれるのが、久々利川。

## 五 久々利について

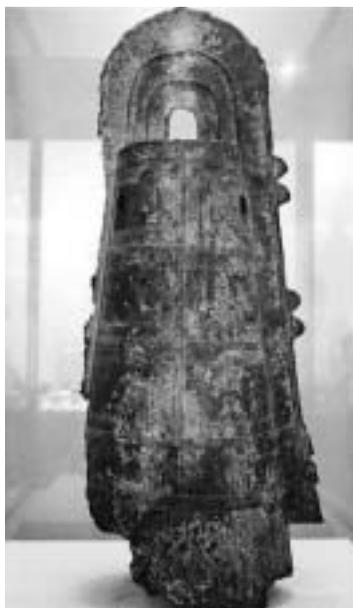
当該歌の「久々利の宮」の地は、『私注』が「潜り」とし、湧水の意味として西濃説を主張するが、やはり岐阜県可児郡久々利と推定される。

久々利の地は、久々利川に沿って浅間山の北斜面に至るかなり広い地域である。前記の『可児市史』第一巻の「後期古墳の分布と可児地域内の地域割」の「久々利川の流域（久々利・羽崎地区）」では、

可児川の支流である久々利水系の広見地内から久々利地内にかけては、ほぼ現在の「大字単位」ごとに六の小群に分かれ、一二六基の後期古墳が知られている。この内横穴墓は九七基を占めており、圧倒的に横穴墓が優位な地区である。地区内ではこれまでに、広見熊野古墳を含む二〇基の古墳が発掘調査されている。広見熊野古墳は、川合次郎兵衛塚一号墳に次ぐ可児地域の首長墳である可能性が高い。また、調査された古墳の内実を見ても、ほとんどが「大型方墳の時代」（六世紀の終わり頃から七

世紀前半頃)を示している。

と圧倒的な横穴墓の存在と、川合地区の次郎兵衛塚一号墳に次ぐ規模の首長墳である広見熊野古墳の存在を記している。この調査報告から久々利川水系の広見地内から久々利地内は、六世紀の終わり頃から七世紀前半頃まで、圧倒的多数の横穴墓の存在から多くの人々が居住していたことが明らかであり、その地域には首長も君臨して居たことが確認できる。



弥生時代後期、袈裟襷<sup>けさたすき</sup>紋様の「近畿式」銅鐸  
享保一八年(一七三三)三月、  
久々利柿下番場地区より出土。  
高さ111cm、底長径約41cm、重さ26kg

(可児郷土歴史館蔵)

また、「可児市史」第二巻の「律令制下の可児郡とその変容」の「美濃国の成立と可児地域」では、久々利地区の条里制遺構の存在を詳しく報告している。久々利の経済基盤は確実に継続されていたのである。

さらに、久々利からは銅鐸が出土している。



久々利川大森川水系の古墳群と銅鐸発掘地  
(可児郷土歴史館展示)

である。可見市久々利柿下から出土し、弥生時代後期のものとされている。銅鐻は農耕祭祀に使用されたと推測され、古墳時代以前の弥生時代後期からの久々利で農耕生活をする人々の存在が確認できよう。

また、廣川も指摘しているが、飛鳥池工房遺跡からこの地にかかわる飛鳥時代の出土品として、次の荷札木簡がある。



193

(奈良国立文化財研究所、木簡データベースより)

(表) 丁丑年十二月次米三野国加爾評久々利五十戸人

物部 古麻里

「加爾評久々利」は、後の美濃国可見郡久々利(可見市久々利)と推定され、「丁丑年」は、天武六年(六七七)にあり、藤原京以前の飛鳥浄御原宮の時代の木簡である。「次米」は「スキノコメ」と訓める。歴史研究では慎重な態度をとる

研究者もいるが、宮廷祭祀の大嘗祭や新嘗祭の時に、全国から新穀を貢進することが指定される「悠紀・主基」の国の、主基を示している可能性が高い。主基国の斎田の新穀が大嘗宮の西の主基殿で神饌に供されたのである。

つまり、久々利はすでに壬申の乱後の天武朝から、大和の中央王権と深い関わりを持ち、律令制的の行政区画に入り、主基の国として選ばれて次米を貢進していたのである。美濃国の中でも久々利は、経済的に恵まれ地域の首長も在住し、中央政権とも関わる特別な地であったことは正しく理解しなくてはならない。

また、同じ飛鳥池工房遺跡から出土し、同じ年の美濃国の荷札木簡にも注意を払うべきである。

(表) 丁丑年十二月三野国刀支評次米

(裏) 惠奈五十戸造 阿利麻

春人服部枚布五斗俵

「刀支評」は現在の土岐をさし、美濃国の斎田として土岐も選ばれていたであろう。久々利と同様に次(主基)米を納めている。美濃国の木曾川側の久々利も土岐川側の土岐も同様に中央政権とは深く関わっていたのである。

また、この地区の窯業にも目を向けておく必要がある。おそらく七世紀頃と思われるが、この地方に須恵器の製法が伝えられると、近隣の土岐地区や多治見地区と同様に窯業が発達した。現在の美濃焼の原型である。そこで生まれた須恵器は、東山道や木曾川の水運を利用して全国各地に運ばれたと考えられる。現在も久々利の中心地から山中を久々利川に沿って県道八四号線を遡ると、「大萱」あたりには古窯跡がある。

このように、久々利は六世紀末頃から七世紀前半頃まで、経済的に恵まれ首長が君臨し多くの人々が住んでいた地域であり、その状況がその後の天武朝まで明確に続いていたことが確認できた。したがって、久々利は東山道に属する美濃国の各地の中で、特別な存在で、注目される地域であることになる。このような久々利のあり方は、当該歌の内容理解に重要な要素として働く。東山道を旅する人々にとっては久々利は無視できない特別な存在であったのである。また、次ぎに触れるように、久々利の八坂入彦の娘をめぐる説話の存在も注意すべきである。

## 六 記紀にみられる美濃国久々利と景行天皇

美濃国関係事項や久々利に関わる記事は、記紀の中にも見られる。古事記の「景行記」には、

大帯日子淤斯呂和気天皇（景行）、纏向の日代宮に坐して、天の下を治めき。

此の天皇、吉備臣等が祖、若建吉備津日子の女、名は針間の伊那毘能大郎女を娶りて、生みし御子は、櫛角別王。次に、大碓命。次に、小碓命、亦の名は、倭男具那命。次に、倭根子命。次に、神櫛王五柱。又、八尺入日子命の女、八坂入日売命を娶りて、生みし御子は、若常日子命。次に、五百木之入日子命。次に、押別命次に、五百木之入日売命。

（中略）

若常日子命と倭建命と、亦、五百木之入日子命と、此の三の王は、太子の名を負き。

是に、天皇、三野国造が祖、大根王の女、名は兄比売・弟比売の二の嬢子、其の容姿麗美しと聞きし定めて、

其の御子大碓命を遣して、喚し上げき。

故、其の遣さえし大碓命、召し上ぐること勿くして、即ち、己自ら其の二の嬢子に婚ひて、更に他し女人を求めて、詐りて其の嬢女と名けて、貢上りき。

(中略)

故、其の大碓命、兄比売を娶りて、生みし子、押黒之兄日子王。此は、三野の宇泥須和氣が祖ぞ。亦、弟比売を娶りて、生みし子は、押黒弟日子王。此は、牟宣都君等が祖ぞ。

の記事がある。後載の日本書紀のように、景行天皇の美濃国行幸に関する記事はないが、八尺入日子命が登場し、景行天皇はその娘の八坂入媛（八坂之入日売命）との結婚している。また、景行天皇は美濃国造の祖である大根王の女に求婚するが、皇子の大碓命が横取りをするという記事もある。

一方、日本書紀では、諸説が紹介する、

四年の春二月の甲寅の朔にして甲子に、天皇、美濃に幸す。左右奏して言さく、「茲の国に佳人有り。弟媛と曰す。容姿端正し。八坂入彦皇子の女なり。天皇、得て妃とせむと欲し、弟媛が家に幸す。弟媛、乘輿車駕すと聞

き、則ち竹林に隠る。是に天皇、弟媛を至らしめむと権りて、泳宮に居します。泳宮、此には区玖利能弥椰と云ふ。鯉魚を池に浮けて、朝夕に臨視して戯遊びたまふ。時に弟媛、其の鯉魚の遊ぶを見むと欲して、密に來りて池を臨す。天皇、則ち留めて通す。爰に弟媛以為はく、「夫婦の道は、古も今も達へる則なり。然るを吾におきては便あらず」とおもひたまひ、則ち天皇に請ひて曰さく、「妾、性交接の道を欲せず。今し皇命の威きに勝へずして、暫く帷幕の中に納されたり。然るを意の不快る所にして、亦形姿も穢陋し。久しく掖庭に陪るに堪へし。唯し妾が姉有り。名を八坂入媛と曰す。容姿麗美しく。志亦貞潔し。後宮に納したまへ」とまわす。天皇聽したまふ。仍りて八坂入媛を喚して妃としたまふ。七男六女を生む。

(中略)

多くの子供が生まれとことを記す。夫れ天皇の男女、前後并せて八十子まします。然るに、日本武尊・稚足彦天皇・五百城入彦皇子を除きての外、七十余子は、皆国郡に封さして、各其の国に如かしたまふ。故、今時に當りて、諸国の別と謂へる

は、其の別王の苗裔なり。

(中略)

多くの皇子に関わる記事

(中略)

是の月に、天皇、美濃国造、名は神骨が女、兄が名は兄遠子、弟が名は弟遠子、並に有国色しと聞しめして、則ち大確命を遣して、其の婦女の容姿を察しめたまふ。時に大確命、便ち密に通けて復命さす。是に由りて、大確命を恨みたまふ。(『日本書紀』景行天皇四年二月条)

の記事がある。景行天皇が美濃国に行幸し、八坂入彦皇子の娘で、「容姿端正しき弟媛」への求婚するが成就せず、姉の「容姿麗美しく。志亦貞潔し」八坂入媛と結婚し、多くの子供に恵まれた様子を説話的に記している。まるで、古事記が記す仁徳天皇や雄略天皇の求婚の段のような趣があり、文学的な内容となっている。景行天皇の権威と権威の範囲を示すとともに、景行天皇と美濃国との強い結び付きを示す内容となっている。

また、「七十余子」の多くの子供は「諸国の別と謂へるは、其の別王の苗裔なり。」とある。この記述に対して小学館新

全集の頭注は、

地名を負った豪族。その出自が天皇から分かれ出たたもので、分封された者という伝承をもつが、後の仮託説話と見られる

とする。景行紀の記述はやはり後の仮託説話と理解するのが自然であろう。

景行紀の天皇と御子たちによる国土平定は、壬申の乱後、天武朝における国家の確立が反映されていると推察される。

また、日本書紀にも美濃国造の女との求婚の段がある。古事記・日本書紀に見られる国造の女との求婚説話は、地方と中央政権との結び付きを婚姻関係で示すという基本的パターンに表現方法に拠るものである。大和王権が東国に勢力の拡大を謀り、東山道の近江国に続く美濃の国を、王権の支配下に置く重要な国として位置づけるために後に取り込まれた説話と推察する。

## 七 久々利と八坂入彦命墓

本稿を執筆するにあたり、筆者は当地を实地踏査した。木

野村も指摘する久々利の主要幹線である県道八四号線を利用し、さらに久々利川に沿ってを峠近くまで行くと、記紀に当地の首長で娘の親として登場する八坂入彦の墓が、宮内庁の管理のもとで「八坂入彦命墓」としてある。実際に八坂入彦の墓であるか否かは不明ではあるが、当地の首長が久々利地区に居た可能性を示す。後世の室町時代には、守護大名土岐氏の一族である久々利氏が要害の地として久々利に久々利城を築き可児地区を治めていたが、古代も同様であったのではなからうか。

この「美濃の久々利の地」と「八坂入彦命墓」の存在は、景行紀に記された「美濃」「八坂入彦皇子」「泳宮（区玖利能<sup>くくりの</sup>弥<sup>み</sup>擲<sup>ちや</sup>）」の表記と符合する。この両者の符合を、前記した景行紀の求婚説話の内容が、当地にまで伝わった結果と捉えることもできる。ただし、その場合に注意しなくてはならないのは、では日本書紀は何を資料にして記載したかと言う点である。日本書紀の異説も記載する編纂態度からして、編纂時の都におけるまつたくの創作とは考えにくい。地方からもたらされた何かの資料に拠って記されたと推定される。つまり、美濃国久々利には、すでに奈良時代の日本書紀成立（七二〇

年）以前に、久々利の地を舞台とする求婚説話が存在し、その説話が紀編纂時に取り込まれて、現在に至ると推定される。また、当所では「八坂入彦命墓」を「皇子塚」と呼んでいる。そして、娘の弟媛の墓とする「乙塚」と呼ばれる古墳がある。「乙塚」は、久々利の主要幹線である八四号線を可児市側から土岐川方面の土岐市に向かい、丘陵の泉町久尻にある。可児市久々利と土岐市とは八四号線の山道で結ばれており、山を生活主体とする人々にとっては、近隣の身近な地域共同体であり、共有する伝承が存続したのであろう。

後の江戸時代になると、信州から尾張への東山道は、土岐から可児を経由し犬山を通過する上街道と、土岐から多治見を通過する下街道があつた。木曾川を利用する街道と土岐川（庄内川）を利用する街道と捉えることもでき、両街道が併存し盛んに人々の往来があつた。そして、その上街道と下街道とを結ぶ山越えの道が多数存在していた。東山道を山中に分け入らないで、可児駅から土岐川に向かう後に国道二一号もあり、久々利川に沿った県道八四号線もあつたのである。上代にも同様の生活道路があり、その中で久々利は注目される地域であつたことに注意しておくべきである。

## 八 久々利説話と当該歌

そして、ここでさらに留意しておかねばならないことは、その奈良時代以前に存在した久々利の地の求婚説話と万葉集の当該歌との関わりである。日本書紀に影響を与えた久々利の求婚説話は、当該歌の成立にも大きな影響を与えている可能性が高いからである。『可児市史』第二巻の第一章第二節の「泳宮」をめぐって<sup>(9)</sup>に、

ただ注意すべきは、この歌謡と景行紀の記述は関連していることである。ともにククリの地名が登場するのみならず、求婚譚としての共通性をもっている。違いは、万葉歌が特定の誰かを示さず、恋の難しさを歌ったものであるのに対し、『日本書紀』は天皇の物語とした点である。むしろこのことは、「男」を「天皇」と位置づけたことよって、『日本書紀』のなかに取り込まれたと言つてよい。

と久々利の求婚説話が、日本書紀に採り入れられる様子を万葉集とともに言及する。

久々利の求婚説話が中央国家の日本書紀に採り込まれるには、中央の都人との関わりが必要である。前記の荷札木簡が示すように久々利は早く天武朝に「主基米」を奉納していたが、奉納には東山道が利用されたと推定される。このように利用された東山道を行き交う人々によって、求婚説話は都にもたらされたと推定される。

日本書紀の記述がこのような過程を経ているとするならば、当該歌の万葉集卷十三への採録も同様で、東山道と関わりと推定される。

早く松田の「『奥十山、三野之山』考」<sup>(10)</sup>説は、当該歌の作者に言及し、

そして「三野之山」即ち「美濃の山」の表現の中に、美濃国ならぬ他国的な立場と美濃人らぬ他国人的な心を見逃してはならない。美濃国内に於いて美濃人自らが成立させた表現でないのである。

とした。廣川も賛同するように、美濃国の人自らが住んでいる土地を、ことさら「美濃の」とは言わないと考える。つまり、美濃国の久々利に居住する人の歌ではないと推定できる。そして、それ以上の作者追求や成立状況は不明とする

のが、研究者の正しい態度である。

ただし、当地以外の実作者となれば、他国の官人が調などを運ぶ地方の人々が想定される。何れとも決定はできないが、官人を選択する方が自然であろう。このように旅にある官人を想定する場合、前記した『全注（曾倉）』説がやはり示唆的である。再度詳しく紹介すると、

久々利の北、丘陵地帯を越えた先に旧中山道、古代の東山道が通っている。その御嶽宿のあった可児郡御嵩町のあたりに『延喜式』の可児駅があったとされる。この歌は、この道を往来する官人たちによって、可児駅に宿泊した夜などに歌われたのではなからうか。南方の山を越えた所に景行天皇の求婚の伝説の地久々利があると聞き——伝説そのものは以前から知っていたかも知れない——、興味を覚えるままタイムスリップし、自分（自分たち）も美女（想像の中では官女たちも含まれていたかも知れない）のいる泳宮に行きたい。そのためには山が靡いてほしい、横になってほしいと、山に向かって足踏みしたり手で突く動作をしながら歌ったのではなからうか。

とする。

久々利は、弥生時代から人々が居住し、後期古墳時代には繁栄を極め、天武朝に中央政權と深く関わりを持つ特異な地であった。その久々利の地の丘陵を隔てた川沿いを東山道が通り、可児駅が設けられ旅人が行き交っていた。この地理的関係を確認するとき、可児駅に宿泊した官人が歌ったとする『全注（曾倉）』説はやはり注目される。

ただし、曾倉説は旅にある官人たちによって「歌われた」「歌った」と説き、成立時期を吉蘇路が拓かれた和銅六年以後の虚構作品と捉える。しかし、当該歌の「奥十山美濃の山」の繰り返し表現からは歌謡性を汲み取ることができ、得がたい女性を願望し、苦渋する内容からは類似性が指摘できる。個人的趣向が高くなった奈良時代の官人の創作とは捉えがたい。

景行紀の記事は、久々利の地を舞台とする求婚説話を日本書紀編纂時に取り入れたとしたが、その久々利の地を舞台とした求婚説話には、古事記歌謡のような求婚歌謡も共存し、当該歌成立に影響を与えたかもしれない。また、歌謡が存在しないとしても、求婚説話で有名であった久々利から丘陵を

隔てた東山道の可児駅は、後述するように地理・地形的に当該歌の内容と符合する。天武朝ごろに可児駅周辺で生まれてきた歌を、旅する官人たちが東山道の名所歌として歌い継ぎ、それが都に運ばれ最終的には万葉集の十三巻に採録されたと推察する。なお、廣川説は、集中の地方の国の様子を都人の前で披露する歌の存在から、当該歌も都での公表という要素を考えている。巻十三に採録される以前に、都での公表を経ていることは想定できよう。

## 九 当該歌の表現

官人であるならば、官道である東山道を進むことになる。都から地方に赴く場合であれ、各務駅から「鵜沼の渡し」を利用して木曾川を渡河し、可児駅に向かうことになる。可児駅に向い東山道を進む官人は、やがて可児川に行き当たり、その可児川に沿って進むと、その可児川に流れ込む久々利川に遭遇することになる。その久々利川の名称から、中央政権と交流があり都人にも著名な美濃の久々利を確認し、その地に伝わる説話を思い起こしたか、新たに触れた可能性がある。

当該歌の表現では、「久々利の宮に〇〇ありと聞きて」とあった。

やがて可児駅に到着し、当地に宿泊する官人は、その地に歌い継がれた当該歌に触れ、南に丘陵地帯があり直接見ることができない久々利に思いをはせることになる。また、視界が遮られ直接見ることがかなわぬが故に、説話の地である久々利への想いは高まる。その想いが当該歌の「美濃の山なびけ」「かく寄れと人は突けども」の表現と重なったと推定する。また、都から旅を進め畿外に入ったのである。望郷の念から生まれる妻への思慕もそこに加わり、「心なき山」の表現になったとみることもできる。ただし、あくまでも推察にすぎない。ただし、実地踏査を実施し、東山道の可児駅に訪れ、久々利に訪れてみると、その位置や地形また距離など条件は当該歌に合致している。推察ではあるが空想ではない。

## 十 おわりに

以上、従来説を調査し確認した後、東山道や別路の様子を確認し、久々利地区に注目した。そして多くの川が存在する

可児盆地の中の久々利には、後期古墳が多く有ること、天武朝と推定される荷札木簡に「三野国」「可尔評久々利」と記されたその地であることを紹介した。

そして、後期古墳時代にすでに繁栄していた久々利は、天武天皇の時代には中央政權と深く関わりを持ち、「美濃国久々利（可児市久々利）」として、特別視された特区であること  
を明らかにした。

一方、東山道は大化の改新以後、中央政權の東国進出に関わり確実に整備された。美濃の中濃地区も可児川に沿って整備され、各務駅から可児駅そして土岐駅へと、官人を始め多くの人々が行き交っていたのである。

当該歌はこの久々利の地の特別な存在と東山道を往来する旅人の存在によって、天武朝以後の何時かに生まれ、官人たちの間で成長していったと推定する。

具体的には、都から地方に赴く中央官人たちが、久々利川をかたわらに見ながら可児川に沿って可児駅（顔戸）に至り、眼前の丘陵の反対側にある久々利の地や当地の八坂入彦の娘に関わる求婚説話に想いをはせながら、享受した歌世界と考える。

注

- (1) 松田好夫「万葉集『行靡闕矣』 卷十三・三三四二の本文復原」『万葉』二十二号、S三三十一・一。（『万葉研究新見と実証』桜楓社、S四十三・一に所収）
  - (2) 井村哲夫「『行靡闕矣』考」続貂『松田好夫先生追悼論文集 万葉学論攷』H二・四。
  - (3) 曾倉亨「萬葉集全注」卷十三、有斐閣、平成十七・十一。
  - (4) 廣川晶輝「『万葉集』卷十三・三三四二番歌について「久々利」と記す飛鳥池遺跡出土木簡と関連させて」『甲南大學紀要 文学編 一六二号、H二十四年・
  - (5) 木野村茂美「不破関と久々利宮を中心に」『東海の「道」から見た上代文学 東海・東山道を基軸に』新典社、H二〇八・三。
  - (6) 佐藤 隆「古東海・古東山道や在地の道も視野に」『東海の「道」から見た上代文学 東海・東山道を基軸に』新典社、H二〇八・三。
  - (7) 大下武「尾張の古道復原 東山道と東海道をつなぐ道」『尾張の古道復原 東山道と東海道をつなぐ道』『旅の古代史 道・橋・関をめぐって』森浩一・門脇禎二編、大巧社、平十一・十二に所収）
  - (8) 可児市『可児市史』第一巻 通史編 考古・文化財、ぎょうせい、H十七・三。
- 「第四章 古墳時代から奈良時代、第三節 古墳からみた後期のようす、二 後期古墳の分布と可児地域内の地域割」や

「九 横穴墓の盛行」に拠る。

(9) 可児市『可児市史』第二巻 通史編 古代・中世・近世・丸  
理印刷株式会社、H二二二・八。

(10) 松田好夫「おきそ山、美濃の山 万葉集の一首は尾張の古  
謡か」。『文学・語学』5、S三二二・九。奥十山、三野之  
山『考』説（『万葉研究新見と実証』桜楓社、S四十三・一  
一に所収）

（文学部教授）